反社会的憧れを抱く大学生の人格の二面性と帰属スタイル

○齋藤慧¹・井上孝代² (非会員)

(¹法政大学大学院人文科学研究科・²明治学院大学)

キーワード: 反社会的憧れ, 人格の二面性, 帰属スタイル

Two-sidedness of personality and attributional style of university students having antisocial admiration

Kei SAITOH¹ and Takayo INOUE²*

(¹Hosei University Graduate School, ²Meiji Gakuin University)

Key Words: antisocial admiration, two-Sidedness of personality, attributional style

目 的

反社会的な行動に対する憧れというものは誰もが持ち得るものである。現代社会の歪みは、そのような思いからただ目を逸らし続けて向き合おうとしない姿勢も影響していると考えられ、自己実現の過程の観点からも、それらと向き合っていく姿勢は重要だと考えられる。それらを意識している者は、より深く自己を認知できているのではないかと考え、本研究は「反社会的憧れ」を抱く大学生の認知特徴を検討する事を目的として行った。

方 法

1 調査対象者: 都内大学に通う男女大学生 303 名 (平均年齢 20.26 歳, $SD=1.47$, 男性 89 名, 女性 214 名) を対象に質問紙調査を行った。

2 質問紙の構成: (1) 「反社会的憧れ群」抽出のための 5 項目の約 4 分の 1 を占めたので、これを「反社会的憧れ群」とした。303 名中、男性 26 名、女性 44 名が該当した。一方、合計点が 5 点および 6 点のものを「向社会性群」とした。

結 果

1 反社会的憧れについて: 先行研究を参考に、「反社会的憧れ群」抽出のための 5 項目の回答から、2 項目以上に「少しあてはまる」(3 点) 以上の回答をしたものが 70 名で全体の約 4 分の 1 を占めたので、これを「反社会的憧れ群」とした。303 名中、男性 26 名、女性 44 名が該当した。一方、合計点が 5 点および 6 点のものを「向社会性群」とした。

2 TSPS-II のスコアの比較: 反社会的憧れ群と向社会性群とでそれぞれのスコアの平均値を用いて t 検定を行った。その結果、二面性を表すスコアである S_{-} においては $S_{-}(P)$, $S_{-}(N)$ のどちらにも有意な差が見られなかったが、どちらの群も両スコア共に小さい値を示していて、ある程度自己の二面性を捉えているといえた。全項目の得点を合計した $S_{+}(P)$ のスコア ($t(218)=2.07$, $p<.05$) と $S_{+}(N)$ のスコア ($t(218)=5.55$, $p<.001$) に有意差が見られ、どちらも反社会的憧れ群の方が有意に高かった。 $S(P-N)$ は向社会性群の方が有意に高かった ($t(218)=-3.22$, $p<.01$)。また、性差を見るために反社会的憧れ群の男性、反社会的憧れ群の女性、向社会性群の男性、向社会性群の女性の 4 群で分散分析を行った。その結果、 $S_{+}(P)$ ($F(3, 216)=6.04$, $p<.01$), $S_{+}(N)$ ($F(3, 216)=13.83$, $p<.001$), $S(P-N)$ ($F(3, 216)=3.60$, $p<.05$) となり有意差が認められた。Tukey 法による多重比較によれば $S_{+}(P)$ において反社会的憧れ群男性は向社会性群男性 ($p<.01$)、反社会的憧れ群女性 ($p<.01$)、向社会性群女性 ($p<.001$) と全ての間にそれぞれ有意差が認められ、それぞれの群の女性同士の間には有意差は認められなかった。 $S_{+}(N)$ においても、反社会的憧れ群男性は向社会性群男性 ($p<.05$)、反社会的憧れ群女性 ($p<.001$)、向社会性群女性 ($p<.001$) と全ての間に有意差が認められ、また反社会的憧れ群女性は向社会性群女性 ($p<.05$) との間に有意差が認められた。また、 $S(P-N)$ に目を向けてみると、反社会的憧れ群女性の値が非常に小さく向社会性群女

性 ($p<.05$) との間に有意差が見られた。桑原により抽出された下位因子および全項目別の比較では、反社会的憧れ群は N 因子全てが有意に高く「しぶとい」「独断的」「付和雷同」などの項目が有意に高かった。

3 帰属スタイルの比較: 対人関係の成功を表す二つの受容場面、対人関係の失敗を表す二つの拒否場面で、その帰属位置「自己の親和性」「自己の努力」「関連する他者」「偶然」のそれぞれの原因帰属軸毎の合計得点を、反社会的憧れ群と向社会性群とで t 検定を行った。その結果、受容場面での「自己の親和性」帰属において有意差が認められた ($t(218)=213$, $p<.05$)。一方拒否場面では「偶然」帰属において有意差が認められた ($t(218)=2.09$, $p<.05$)。

4 反社会的憧れと TSPS-II のスコアおよび原因帰属との関連: 303 名全員の評定を用いて反社会的憧れ群 (70 名) にダミー変数の 1 を与えて「反社会性」とし、向社会性群 (233 名) には 0 を与えて TSPS-II のスコアと原因帰属の相関係数を算出した。「反社会性」は、TSPS のスコアにおいては $S_{+}(N)$ に有意な正の相関 ($r=.31$, $p<.01$) が、そして $S(P-N)$ とは有意な負の相関 ($r=-.21$, $p<.01$) が見られた。帰属尺度においては、「反社会性」は受容場面の「自己の親和性」帰属 ($r=.12$, $p<.05$)、拒否場面の「関連する他者」 ($r=.12$, $p<.05$) 帰属と正の相関が見られた。また、反社会的憧れ群の特徴である $S_{+}(N)$ と受容場面の「自己の親和性」帰属にも有意な正の相関が見られた ($r=.12$, $p<.05$)。

考 察

分析の結果から、反社会的憧れ群は人格の二面性を積極的に自覚し、特に自己のネガティブな部分を自覚している事が明らかになった。しかし、 $S_{+}(P)$ の得点も高かった事から、自己受容感も高い事が示唆された。下位因子及び項目別の比較では「自己のネガティブな部分も捉えているが安定している」「こだわりを持つが対人関係においては多少ドライ」「臨機応変に対応できる」という反社会的憧れ群の特徴が浮かび上がってきた。また、帰属スタイルの特徴は「成功は自己の能力に、失敗は偶然に」という達成動機を維持するのに重要とされる帰属スタイルである事が明らかになった。また、このような帰属スタイルであるからこそ、自己のネガティブな部分も受け容れられる可能性が示唆された。以上より、「反社会的憧れ」を自覚する事で更なる自己の発展の可能性が示唆され、「反社会的憧れ」といった「悪」とされがちなものからただ目を逸らすだけではなく、それを「持たなければいけない」わけではもちろんないが、時にはしっかりと向き合っていくための在り方も更に検討していく必要があるだろう。

引用文献

- 桑原知子 (1991). 人格の二面性について 風間書房
 榎木佳子 (2005). 反社会的憧れを抱く中学生の帰属スタイルと自尊感情 犯罪心理学研究, 43, 1, 17-35.